

文法解明叢書 51

十訓抄古今著聞集要解

《付・沙石集》

高橋 貢 著

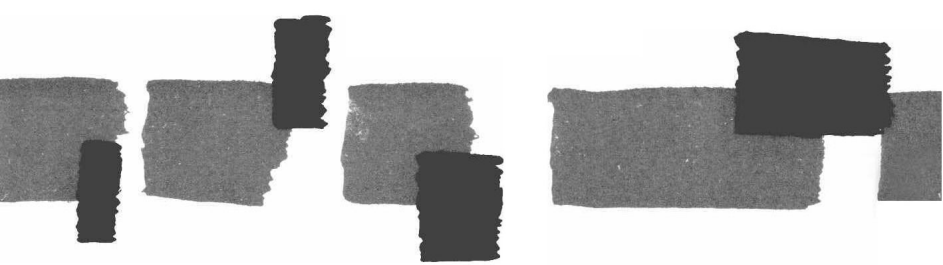
有 精 堂

文法解明叢書

十訓抄・古今著聞集要解

〈付・沙石集〉

高橋 貢 著



有 精 堂

著者略歴

早稲田大学第一文学部
卒、現在早稲田大学大学
院博士課程在籍。現職早
稲田実業学校教諭。
〔著書〕日本靈異記口語
訳（東洋文庫）

本書は著者
と合議の上
検印を省略
しました。

昭和四十四年三月二十日 初版発行 昭和四十四年十二月三十日 三版発行 文法解明叢書51 十訓抄・古今著聞集要解 〔付・沙石集〕	著者 高橋 貢	発行者 東京都千代田区神田神保町一ノ三九 山崎 清 一	印刷者 東京都新宿区市ヶ谷富久町一三 株式会社 井村印刷所	発行所 東京都千代田区神田 神保町二丁目三九番地 振替口座東京四〇六八四番 有精堂出版株式会社
---	----------------	--	--	---

落丁・乱丁はおとりかえいたします。

定価 ￥230
7393—310151—8610

は し が き

解題で述べるように、十訓抄、古今著聞集、沙石集は中世説話文学の主要な作品である。説話文学は中古（平安時代）、中世（鎌倉、室町時代）に全盛となった。説話文学には貴族、僧、武士、農民、商人、乞食等あらゆる階層の人々が登場し、それらの人々が話の主役となっていくと活躍している。中古、中世は一方では貴族文学全盛の時代である。そのような時代に説話文学があらわれたことは貴重である。説話文学の価値が認められるようになったのは近年のことである。小・中・高校の国語教材や大学入試にも説話文学が採用されるようになって来た。この傾向は今後ますます増大するであろう。

本書を利用される諸君が国語の実力をつけると共に、説話文学に興味を持たれるならば、望外の幸いとするところである。

昭和四十四年一月

著者しるす

凡 例

一、本書は十訓抄、古今著聞集、沙石集の中から、最近の教科書や大学入試に出されたものを主とし、他に著名で一般に親しまれているものを選んだ。

二、本書がよった本文は「十訓抄詳解」（石橋尙宝著）、日本古典文学大系「古今著聞集」「沙石集」であるが、高校生向きとして、ふり仮名、送り仮名、句読点、引用符号、段落等を補った。

三、本書の仮名遣いは、本文中は歴史的仮名遣いにより、その他は現代仮名遣いによった。ふり仮名も同じである。

四、本書の文法は通説に従った。

五、口訳は意訳をさけて、正確さを期した。

六、語釈は簡明、分りやすさを第一とした。

七、参考欄は、その説話の出典、同、類話との関係、説話文学における重要度、文学としての性格を記し、読解の上で参考に資するようにした。

八、研究は、学習の上で読解力を練摩するのに適当な問題を選んだ。

目次

はし が き

凡 例

解 題

文法用語略号一覧

要 解

十訓抄

序 二〇

ある殿上人と女房達 二四

平重盛の賀茂祭見物 二七

道長の若い時 二九

小式部の内侍の大江山の歌 三

目次

「才能は歌よみ」と書いた男の話 三

紀友則の初雁の歌 三五

恵信僧都の妹と強盗の話 三七

笛吹き成方の機知 二九

輔親と伊勢武士 三

北面武士の受領下向のまねのこと 三五

行成が実方の為に冠を打落された話 四〇

西行法師の娘の死 四三

鴨長明の出家 四四

才能・芸事を庶幾すべき事	四
頼政、鵜を射ること	五

古今著聞集

菅原道真	五
玄賓上人の話	七
能因入道の歌	九
小大進が和歌をよんで嫌疑を晴らした話	二
「才能は歌よみ」と書いた侍の話	五
西行法師の歌合	六
衣のたてはほころびにけり	三
義家が宗任を近侍させた話	四
臆病法師の話	九

灰を食べた盗人	八
殿上人の逍遙	五
西行法師が中将公衡を尋ねる話	七
荒馬から落ちた男	三
藏人永継の即答	五
智願上人の乳母	六

沙石集

薬師観音利益の話	九
清水観音利益の話	一五
研究の解答	二二
重要語句索引	二四

解題

一 「説話」^{せつわ}と「説話文学」

国文学を幾つかのジャンル（部門、類型）に分けると、十訓抄、古今著聞集、沙石集は「説話文学」というジャンルに属している。そこでまず「説話」と「説話文学」について記しておく。

「説話」の意味 説話とは、簡単に言うると「はなし」という意味であるが、まとまりのない日常会話的なはなしではなく、「誰が」「どこで」「どうした」というようにまとまりをもった叙述的なはなしである。会話や対談、応答、呼びかけの類は説話ではない。説話は一方的なはなしであって、一人の話し手が多く語り、他の人々はだまって受け、返事だけをしているものである。

説話の特色 説話の特色としては、伝承する（伝えられる）という特色がもっとも重要である。伝承を大きく分けると、一、口承（口で語り伝えられる）、二、書承（書き写して伝えられる）の二種に分けられる。本書に採録した十訓抄、古今著聞集、沙石集の話にしても、同じ話が他の説話集や書物に記されている場合が多い。このことからそれらの大部分の話は説話集の作者（または撰者ともいう）が創作したのではなく、伝えられて来た話を記したということが分る。

説話の種類 説話ということばは、専門的な用語であって、色々な話を含んでいる。説話を分類すると、神話、伝説、昔話、民話、世間話、故事等に分けられる。古事記、風土記等上代の書物にとり上げられている説話は神話、伝説が多いが、平安時代から鎌倉、室町時代の説話集にとられている説話は、貴族、官吏、歌人、武士、庶民の周囲に起った事件や人に関する話、即ち世間話が主流を占めている。また仏教に関する話―釈迦や仏菩薩の話、高僧の話、法花経の靈驗の

話、寺塔の縁起の話も多い。

説話の文学性 新潮社刊「日本文学大辞典」で説話と説話文学を別項にしているように、説話は直ちに説話文学とは言えない。説話が今日の読者に文学的興味や関心を与えなければ説話文学とは言えない。説話の文学性をどこに見出すかは研究者の立場、見方によって異なる。「日本文学大辞典」の「説話文学」の項を見ると、「説話文学の対象としての説話に多少とも文学意識が加わり、素朴な原始文学の形態と内容を有するにいたったもの、即ち伝承文学の域に在るもの、而もなお未だ個人作家の創作意識の明確に働いた純文学作品の域には到っていないものをいうと要約することができよう。（中略）普通には、説話集の形を成す作品に対して、特にこの称呼が与えられているが、それは個々の説話文学の集合ないし類聚ということと、それよりはむしろ合集せられ説話群が全体として一個の文学としての、また作品としての存在を主張しているということと、二重の意味において、いずれの点からもこの名称の妥当な適用と言うべきである。」と記している。説話文学としての第一条件は、話が説話集としてまとめられることが必要であり、次に説話集自体の文学性と、説話集にとられている個々の話の文学性を問題にすることになるが、平安時代から鎌倉、室町時代の説話集とその文学性を扱う場合、この説は一つのヒントを与える。

説話文学の特色 物語、小説と比較した場合の説話と説話集の主な文学的特色を左にあげておく。

一、叙述の仕方が簡潔、素朴であって、具体的で、会話が多く使われている。また主題の展開に直接かわりのないストーリーや人間の心理、描写、記事を省略し、簡潔に、スピーディーに話を進める。

二、説話集の場合、さまざまな職業、階級に所属する人、或は男女老幼が各話の主人公として登場し、動植物、鬼、霊、天狗も活躍している。また話の種類（発心、出家、往生、靈驗、滑稽、怪異、合戦、芸能等）、地理的範囲、話の筋、時間等多種多様の話をのせている。このようなさまざまな話をのせているところに説話集の価値、特色がある。

三、話によって、各時代の社会的背景や人々の関心があらわれ、盛り込まれている。

四、表現上の技巧について述べると、簡単な叙述の中にも誇張や対照があり、会話に擬声語、俗語が用いられている。一方王朝的な話には対句や調子のよい表現が使われている等、話によって技巧が使い分けられ、表現が違っている。

中古、中世の説話集 古事記、日本書紀、風土記、万葉集にも説話はとられているが、説話集としてまとまった作品は中古(平安時代)以後である。左に中古、中世(鎌倉、室町時代)の主な説話集を掲げる(カッコの中に成立時期と作者(または編集者)を記す)。

〔中古〕

日本国現報善惡靈異記(弘仁十四年頃、八二三、景戒)

日本感靈錄(承和十四年頃、八四七、義昭)

紀家性異実録(現存しない。平安中期、紀長谷雄)

善家秘記(現存しない。平安中期、三善清行)

大和物語(天曆八年頃、九五四、編集者不明)

三宝絵詞(永観二年、九八四、源為憲)

日本往生極楽記(永延元年頃、九八七、慶滋保胤)

本朝法花驗記(長久年間、一〇四〇―一〇四三、鎮源)

地藏菩薩靈驗記(平安中期、実睿)

宇治大納言物語(現存しない。平安中期、源隆国)

江談抄(長治、嘉承の頃、一一〇四―一一〇七、大江匡房)

百座法談聞書抄(天仁三年頃、一一二〇、編集者不明)

今昔物語集(保安、大治の頃、一一二〇―一一三一、編集者不明)

打開集（長承三年以前、一二三四、編集者不明）

俊秘抄（大治の頃、一二六―一二三一、源俊賴）

古本説話集（大治の頃、編集者不明）

世継物語（平安後期、編集者不明）

宝物集（治承三年頃、一一七六、平康頼）

唐物語（平安後期、編集者不明）

〔中世〕鎌倉時代

蒙求和歌（元久元年、一二〇四、源光行）

発心集（承元二年―建保四年、一二〇八―一二二六、鴨長明）

古事談（建暦二年―建保三年、一二二二―一二二五、源顯兼）

続古事談（建保七年、一二一九年、編集者不明）

宇治拾遺物語（建久―仁治の頃、一一九〇―一二四二、編集者不明）

閑居の友（承久四年、一二三二、慶政）

撰集抄（寛元―建長の頃、一二四三―一二五六、編集者不明）

十訓抄（建長四年、一二五二、六波羅三蔵左衛門入道）

古今著聞集（建長六年、一二五四、橘成季）

私聚百因縁集（正嘉元年、一二五七、住信）

沙石集（弘安二―六年、一二七九―一二八三、無住）

雑談集（嘉元三年、一二〇五、無住）

今物語（延応元年、一二三九以後、藤原信実）

〔中世〕室町時代、

神道集（文和、延文の頃、一三五二—一三六一、安居院）

三国伝記（応永一四年、一四〇七、玄棟）

二 十訓抄解題

編集者と成立 作者（編集者）については古くから第一に橘成季説、第二に菅原為長説、第三に六波羅二藤左衛門入道説がある。第一の説は今日否定されているが、第二と三の説は甲乙つけがたく、どちらとも決定していない。成立時期は序に「建長四とせの冬、神無月の半ばの比」とあるところから、建長四年（三三）であることは明らかである。

内容 本書は十箇条の儒教的な徳目を掲げ、それぞれの徳目にあわせて説話を集めている。直接には少年のための教訓書として編集している。そのため従来は倫理、教育の方から本書をとり上げ、問題にする傾向が強かったが、説話を集める時に説話自体の興味にひかれて歌集や物語、先行の説話集から話を抄出している場合もあり、そのようなところに文学的価値を見出すようになった。大部分の説話は印度、中国の話、日本の話では平安時代以前の話であり、それらの話は口で語られていた話を採録したというよりも、先行の書物に書かれていた話を抄出した場合が多い。一方数は少ないが、平清盛が恵みの心が深かったというところ（巻七）に、平家物語の記事とは違った清盛像が見られる等、興味のある話もある。

本書で掲げている十箇条の徳目は次の通りである。

第一可^キ定^ス心操振舞^ル事、第二可^キ離^ル三^ノ嬌慢^ノ事、第三不^レ可^キ侮^ル人倫^ノ事、第四可^キ誠^ス人上多言^ノ事、第五可^キ撰^ル朋友^ノ事、第六可^キ存^ス忠信廉直^ノ事、第七可^キ専^ス思慮^ノ事、第八可^キ堪^ス忍^ス諸事^ノ事、第九可^キ停^ス怨望^ノ事、第十可^キ庶^ス幾^ノ才能芸業^ノ事。

三 古今著聞集解題

編集者と成立 本書には漢文の序とかな文の跋、編集者の署名とがあつて、全体が整然と構成されている。それによると従五位下橋成季が編著者で、建長六年（三三六）十月の成立である。

内容 本書は二十卷三十編からなる。序文によると、宇治大納言物語や江談抄の流れをくむ説話集を編集しようとした意図があつたことは明らかであるが、一方跋文によると、詩歌管絃に關した古今の佳話を集めて絵として遺そうという意図もあつた。しかし全編七百二十余りの話は多種多様であつて、この意図を逸脱した話がある。地方的、庶民的な話や、あるいは卑猥に流れた話もあるが、かえつてそのようなところに文学的興味をひかれる。

四 沙石集解題

編集者と成立 序文と卷十末の述懐、識語によつて、本書は無住法師が弘安二年（三九〇）に起稿し、六年秋に完成したことが明らかである。無住は沙石集以外に聖財集、雜談集、妻鏡の著がある。雜談集は説話集として重要な書である。

内容 本書編集の直接意図は弘法値遇の縁、菩提心をおこす種として説話を集めてゐるわけであるが、従来の説話集にはとり上げられなかつた興味のある話がある。例えば、真言宗の檢校（寺社の事務を監督する僧）覺海が前生のことを知りたいと思つて祈ると、「最初は蛤であつたが、子供が拾つて天王寺に持つて行つたので次に犬と生れ、お経や陀羅尼の声を聞いたので次に牛に生れ、（中略）最後に生れかわつて檢校になった。」とお告げがあつたという前生の話（卷二第十）、欲の深い坊主があめを造つて食べていたが、子供には毒だと言つて与えなかつた。ある日坊主が外出していた時、子供はあめをなめ、坊主が大切にしていた水瓶をこわした。坊主が帰つて来ると、子供はわざと泣いて、「大切な水瓶をこわしましたので、毒をなめて死のうとしましたが死ねませんでした。」と言つた話（卷八第十一）。沙石集にはこのほか動

物の話、和歌の話、往生の話等さまざまな話がある。これらの中には先行の書物から引用した話もあるが、また著者自身の見聞した話、村里に伝えられた伝説、民話も多くとり上げられている。この中には後の文学や狂言、落語とつながる話もある。

五 参 考 書

手に入りやすい主な本文、注釈書には、「十訓抄詳解」（石橋尙宝著、昭和二年、明治書院刊）、「十訓抄新釈」（岡田稔、昭和二年、大同館）、日本古典文学大系「古今著聞集」「沙石集」（岩波書店）がある。なお内野吾郎著「説話文学要解」（有精堂刊）を参照されたい。

「付記」

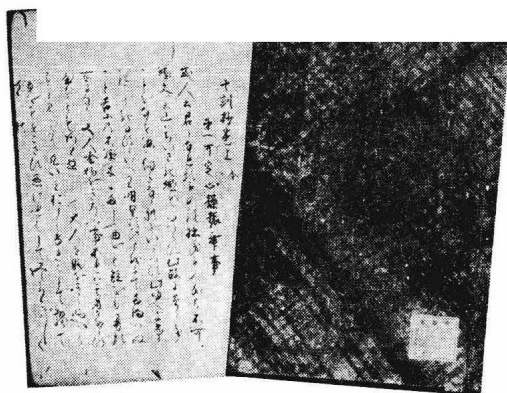
本書を出すにあたって、三谷栄一博士、三谷邦明氏、田嶋一夫氏、村上春樹氏の御援助を得た。誌面を借りて御礼申し上げます。

文法用語略号一覧

代名	代名詞	自	自発の助動詞
四	四段活用動詞	尊	尊敬の助動詞
上二	上二段活用動詞	使	使役の助動詞
上一	上一段活用動詞	推	推量の助動詞
下二	下二段活用動詞	意	意志の助動詞
下一	下一段活用動詞	当	当然の助動詞
ナ変	ナ行変格活用動詞	命	命令の助動詞
ラ変	ラ行変格活用動詞	打	打消の助動詞
カ変	カ行変格活用動詞	希	希望の助動詞
サ変	サ行変格活用動詞	反	反実仮想の助動詞
ア…ワ	ア行…ワ行	完	完了の助動詞
形ク	形容詞・ク活用	過	過去の助動詞
形シク	形容詞・シク活用	断	断定の助動詞
形動	形容動詞	比	比況の助動詞
連体	連体詞	詠	詠嘆の助動詞
副	副詞	伝	伝聞の助動詞
接続	接続詞	過推	過去推量の助動詞
感	感動詞	未然形	未然形
受	受身の助動詞	連用形	連用形
可	可能の助動詞	止	終止形

体	連体形
已	已然形
命	命令形
格助	格助詞
接助	接続助詞
副助	副助詞
係助	係助詞
終助	終助詞
間	間投助詞
(接頭)	接頭語
(接尾)	接尾語
(幹)	語幹
(音)	音便
[注一]	名詞(固有名詞、普通名詞)は省略した。
[注二]	助詞は六分類法をとった。
[注三]	形容詞のク活用とシク活用の区別は省略した。

十訓抄



序

*十訓抄編纂の目的を記す

接 助 形、体 形、体 格助ラ変、体
 それ、世の中にある人、ことわざしげきふるまひにつけ
 接 助 形、体 形、体 格助四、未、打消、用 形動、体 格助とく、形、用 形動、体
 て、高きいやしき品を分かず、賢なるは得多く、愚なる
 格助し、形、止 接 形、用 四、用上、体 格助むかし、格助
 は失多し。しかるに、今何となく聞き見る所の昔今の
 格助 格助サ変、用 格助 格助こと 格助 格助
 物語をたねとし、て、よろづの言の葉の中より、
 副 代名格助 格助 格助四、用 格助 形、体 格助 格助 格助
 いささか其の二つの跡を取りて、よき方をばこれを
 下二、用 形、体 格助 格助 格助 格助 格助 格助
 すすめ、あしき筋をばこれを誡めつつ、いまだこの道
 格助四、用 四、未、打消、未推、体 格助 格助 格助 格助 格助 格助
 を学びしらざらん少年のたぐひをして、心をつくる便
 格助四、未、使、未、意、体 副 格助 格助 格助 格助 格助 格助
 となさしめむため、試に十段の篇を分ちて、十訓
 格助 格助 下二、止 接 格助 格助 格助 格助 格助 格助
 抄と名づく。則、三巻の文として、三余の窓に
 四、未、意、止 格助 断、止 代名 格助 格助 格助 格助 格助 格助
 置かむとなり。その詞、和字をさきとし、て、
 副 格助 形、未 打消、止 上二、体 格助 形、未
 必しも筆のつひえおほからず。見る者の目安から

口説 そもそも、世の中に住んでいる人は、いろ
 いろなことが多く、それに付随して起る行な
 いにつけて、身分の高い者とか低い者とかにか
 わりなく、誰でも賢い者は得が多く、おろかな者
 は損失が多い。だから、今何ということなく聞い
 たり見たりするところの昔や今の話をもととし
 て、多くの話の中から、少しばかりその両者の残
 した事跡を取りあげて、よい方はこれをすすめ、
 悪い方はこれを戒めては、まだこの道を学び知ら
 ないような少年達に、注意する手引とさせようと
 するために、ために十段に篇を分けて、『十訓
 抄』と名づける。そこで、三巻の書として、読書
 の窓に置こうとするのである。そのことは、仮
 名文字を第一として、必ずしも筆をついやして長
 たらしくすることを考えない。見る者が見やすい
 ようにと言うことを考えるが故である。その例話
 は、中国のものを第二とし、多くの書物を広くあ